

4歳児 そら組 指導案

「鹿苑の鹿にドングリを届けよう」

奈良教育大学附属幼稚園

教諭 鎌田大雅

◎子どもの姿(そら組 男児19名 女児14名 計33名)と育ちの読み取り

- ・10月の運動遊び参観や11月に入って行った遠足など、園内の行事に一人一人が積極的に参加するようになり、「〇〇を頑張りたい」「遠足に行ったらこんなことをしたい」など、個人差はまだ大きく、保育者の環境構成や援助の必要な場面もあるが目的意識を持ってある物事に主体的に関わろうとしている。また、そのことについて、友達がいるからより楽しいものになっているということを感じ始めている。
- ・好きな遊びの中で、一輪車に乗りたい思いを持ってコツコツと何回転けても取り組む姿や、滑り台を段ボールを下に敷いてスケートボードのように滑る遊びにも、下までこけないで滑るために自分の体の動きを調節したりするなど、「できるようにになりたい・こうになりたい」という自分なりの目的をもって粘り強く取り組むようになってきている。
- ・自分の好きなものをつくったり描いたりする遊びの中では、自分のイメージしたものを納得いくまで作り込んだり描き込んだりすることを楽しむ一方では、友達がつくったり、かいたりしているものに刺激を受けて同じようにしたり、一緒につくったりする姿が見られる。同じく、カプラや大きなブロックを使った遊びでも、自分のイメージを形にしていく傍らで同じイメージをもって友達と一緒につくっていく姿がある。自分なりの目的やイメージが、好きな遊びが同じだったり、気の合う友達同士のかかわりの中では共有されるようになってきており、そのこと自体が楽しいと感じられるようになってきている。
- ・砂場の遊びでは、筒やトイをつなげたコースに砂を詰めて、そのコースに水を流すことで、コースの砂がなくなることを楽しんでおり、その際、コースに砂をひたすら入れる子ども、コースに水をどんどん流す子どもに分かれてそれぞれが友達と一緒に力を合わせて遊んでいる。鬼遊び(ケイドロ鬼)でも、鬼チームが捕まえた友達を助けられないように守ろうとする姿が見られたり、逃げる側のチームも、何とかして鬼を誘い出し、助けようとするようになってきた。遊びの中での役割やチームを意識するようになり始めており、それぞれの立場や状況で、どうしたらいいのかを考えながら遊ぶようになってきている。

◎ねらい

- クラスで目的をもち、活動に取り組む中で充実感を味わう。
- 自分の思っていることや考えていることを伝えようとする。

◎活動について(経緯も含む)

好きな遊びの中では気の合う友達との仲が深まり、目的や面白さを共有できるようになってきている。一人一人も目的やイメージを持ち遊びに取り組むことが楽しくなっている。そこで、運動遊び参観や遠足同様にクラスの全員で何か一つの目標に向かう活動を取り入れることで、クラスとしての充実感が味わえると考えた。そこで、毎年行っているドングリ拾いに目的を子どもたちが持てるように、奈良の鹿、ここでは特に鹿苑の鹿の話をした。クラスの目的を「鹿苑のためにドングリを拾う」という意識に向けられるように、話し合いを展開し、子どもから「ドングリを拾って鹿苑に届けよう」と声が上がると、その後の活動が続いていった。

◎教材について

・奈良の鹿について

本園の園児にとって、奈良の鹿はとても身近な存在である。通園途中に見かけることはもちろん、園内からも住宅地を徘徊している鹿が見えたり、大学構内に住んでいる鹿をフェンス越しに間近で見たりすることができる。そのような関係性であるために、興味をより示しやすく、親しみが持ちやすい生き物である。

また、神様の遣い「神鹿」として、歴史的にも大切にされてきたという事実や、第二次世界大戦で急激に数が減少し、そこから国の天然記念物に指定されて国をあげて守っていくものであることなど、奈良の歴史、日本の歴史と大きなつながりがあり、生き物の生態系の観点のみならず、歴史的な観点も持ち合わせていることが大きな特徴である。

・鹿苑、奈良の鹿愛護会について

奈良にいるおよそ1300頭の鹿のうち300頭ほどは、鹿愛護会の方が運営している鹿苑で保護されている。保護の理由はさまざまで、病気や怪我、妊娠期の鹿、畑の野菜を食べたり、畑を荒らしたり、人に危害を加えてしまう恐れがある鹿などである。奈良の地で、昔から野生動物としての鹿と、程よい距離感で生活してきたことを受けてそのバランスを保つ一端を担っている。実際に施設の見学もでき、奈良の鹿についての資料を見ることができる。

年間を通して、鹿苑の鹿の餌の寄付を募っている。草刈りをした生草や干草、ドングリなどがさまざまな団体から寄付されている。その団体の中には幼稚園や小学校、地域のこども会なども含まれている。

・地域の神社へのドングリ拾い

毎年、本園の3、4歳児が11月になり、園外保育で地域にある鏡神社にドングリ拾いに出かける。境内には多くの種類のドングリが無数にあり、拾ってきたドングリを遊びの中に取り入れたりしていた。今年度はクラスに神社の神主さんのお子さんがある。神社で開かれたお祭りにも参加している用事も多い。

活動が進む中で神主さんに話を聞く機会があり、そこで、ドングリを拾うことで、鏡神社としても助かる、ありがたいという話であった。子どもたちが鹿のためにドングリを拾うことで鏡神社の方も喜ぶということがわかった。

◎環境構成・援助

・奈良の鹿愛護会のHPを子どもと見ながら、鹿苑の鹿について知る機会を保育者から提案する。子どもたちが身近に感じている鹿とは少し違った鹿が同じ奈良公園にいることがクラスの多くの子どもに伝わるようにする。

・職員が録画していた「ダーウィンが来た！」で奈良の鹿が特集されていた。年間を通して、鹿が奈良の市街地でどのように人間と共生しているのかを、映像と解説を交えて教えてくれるといった内容であった。より子どもたちが鹿への興味が広がり、深まると考え、試聴した。

◎ESDとの関連

・本活動で働かせる ESD の視点(見方・考え方)

・有限性

鹿苑にいる鹿の餌が限られており、たくさんの人からの寄付で成り立っていることから、餌の有限性、有限であることを知り、自分達ができることを考えて実行するきっかけとなる。

・責任性

鹿苑の鹿のためにドングリをたくさん集めるという気持ちをもって活動に主体的にかかわる。

・本活動を通して育てたい ESD の資質・能力

・進んで参加しようとする態度《参加》

クラスの中での出来事に自分なりに興味を示し、自分ごとに捉えて参加してみよう、かかわってみようとする。

・つながりを尊重しようとする態度《関連》

ドングリを寄付することを通して、自分と鹿、自分と社会がつながっていることを実感する。

・本活動で変容を促す ESD の価値観

③自然環境や生態系の保全を重視すること

普段身近に感じている鹿について、当たり前の価値観を鹿苑の存在を伝えることで揺さぶる

①世代間の公正を意識すること④人権・文化を尊重すること

鹿が大切に守られてきたことを知ること、世代を超えて守られてきた大切な生き物であり、これからも同様に守り続ける存在であることを知る

・達成が期待される SDGs

・目標4【教育】

・目標15【陸上資源】

・目標17【実施手段】

・目標11【持続可能な都市】

◎展開

主な活動内容	予想される幼児の反応等
○担任から鹿苑の鹿についての話を聞く。	●「ドングリを拾ったらいい」「拾ったドングリを鹿苑に届けたいい」という声があがる。
○ドングリがある場所を考える。	●「幼稚園にもある」「幼稚園の森とか、裏の坂道にもいっぱいある」「幼稚園に来る途中の坂道にも落ちてる」と、思いつくまま口々に話す。
○幼稚園に落ちているドングリを拾う。	●「みんなで鹿のために拾いに行く」と、掛け声と共に神社のドングリを一人一人が一生涯懸命に拾う。
○神社にドングリを拾いに行く。	●年間通しての鹿の生態を知る。
○「ダーウィンが来た!」を視聴する。	●展示物にも興味を示し見たり、鹿のことをスタッフに質問したりする。
○鹿苑にドングリをもっていく。	
○鹿苑の見学をする。	

◎実際の子どもの姿

クラスでの話し合い



(鹿苑の鹿について担任から聞いて)
「どんぐりを拾おうよ」「幼稚園の森にもあるよね」
「幼稚園に来る途中にもあるよ」と、自分達が知っていることを重い思いに話す。
I児は、話の最後に「拾ったどんぐりを鹿苑にとどけよう」と、みんなの前で話し、クラスみんなの目標が「自分達でどんぐりを拾って鹿苑に届ける」ことになった。

園・神社でのどんぐり拾い



楽しみながら鹿のためにどんぐりを一生懸命に拾った。個人差はあるが、地域の神社に行ったどんぐり拾いで、ほとんどの子どもたちが30分間どんぐりを拾い続けた。集めたどんぐりを広げ、「みんなでいっぱい拾うことができたね」と、喜び合う姿が見られた。

家庭で集めたどんぐり



鹿苑にいくまでの期間、毎日ちよつとずつ拾ってくる子どもや、休日に家族で拾ったり、おじいちゃんの家で拾ったりする子どもが数名いた。少しずつ溜まっていく様子をクラスで共有したり、拾ってきた友達を紹介したりした。



番組「ダーウィンがきた!」を視聴し、鹿への興味を広げた。中には、鹿の生態に興味を示す子もおり、映像から感じたことは子どもたちそれぞれで、改めて鹿が怖いと感じたり、戦争を機に数を減らしたこと、そこから国の天然記念物に指定され守られてきたことなどを知った。



鹿苑への園外保育に行く。拾い集めたどんぐりを全員で分けてリュックに入れ、40分歩いた。園全体で82.3キロのどんぐりを寄付することができた。その後、スタッフの方から奈良の鹿についての話を聞き、「鹿の角はなぜ取れるのか?」などの質問をした。